

1 水 葬・第七清寿丸の被爆

おれたちは

病院から遺体をひきとり

魚倉に

水と

おれたちの無念と

彼への哀悼を満たし

彼の死をおさめた

彼は海水を浴びて被爆した

苦しみに彼が卒倒した時

その放射性物質は

彼の血液のなかで にえたぎった

外地の病院で

彼は二日間苦しみ

親友の涙を帯びて死んだ

おれたちは

線香の代りに蚊取線香を立て

パイナップルを供え

ビキニへの怒りと憎しみを……

それなのに無電は

日本に持ち帰るな!!

水葬にせよ!!

おれたちは

泣き泣き彼を水葬にした

大漁旗に抱かれて

紺青の海面に沈む彼を

おれたちの涙が追う

だから おれたちは

ビキニを告発する

汚染した海に殺された船乗りを

汚染した海に水葬させた国を

鮪漁船・第七清寿丸(一五三トン・神奈川県三崎船籍)

はビキニ核実験当時、N一〇度・E一七五度、四月はN一〇度、E一五〇度付近で操業。

この海域は最も海水が汚染されていた(後鶴丸調査報告・リットルあたり三五〇カウント)、死亡した吉岡洋さん(当時十九才)は、体が汚れたといっ、いつも海水を浴びていたことから、海水汚染による被爆とみられる。

発病・四月十日、バラオの病院に緊急入院・五月八日、二日後死亡。

3 一枚の声明文・第十三光栄丸の被爆

あなたたちは

生活の糧を捨てることができるか

おれたちは

黒潮の海を

五十余日

生死をかけて鮪と戦い

そして被爆と戦った

その鮪を

おれたちは捨てさせられた

ガーガーなる計器に

おれたちの毛髪は逆立ち

おれたちは

モルモットにされた

おれたちは

注射の針ネズミになり

大丈夫だろうと放りだされた

船体や魚は危険で

どうして

おれたちが安全なんだと

おれたちは訴える

一枚の声明文にして

鮪漁船・第十三光栄丸（一九九トン・神奈川県三崎船籍・二十三名乗組み）はビキニ核実験当時、ビキニ南東八〇〇哩、N九度一分・E一七八度一分で操業中被爆、三月二十六日、沖合での船体洗いを施行するも、船体検査では最高八〇〇〇カウント、衣類五〇〇〇、人体からは一〇〇〇カウントの反応がみられた。

また人体の白血球検査では四〇〇〇台が四人、他の乗組員も著しく低下という結果がでたが、厚生省の医師は「大丈夫だろう」とサジを投げた。

その後、第十三光栄丸の乗組員はこれを機に十三人が下船、その消息は不明、なお、この船は一九五六年一月、潮岬南方八〇〇哩の沖合で台風に遭遇、沈没、全員が死亡している。

7 共 鳴・第八順光丸の被爆

生きたい もっと生きたい—
と病床から訴えていた兄の声が
あなたたちに聞こえますか
私には
いや 家族をビキニに奪われた人々になら
哀しみと怒りが共鳴して
胸にうずいて聞こえるでしょう

私の兄は
僚船の船員を助けるために
南太平洋にジャンプして
ペニシリンを届けたという
それが兄と乗組員一同の
被爆のはじまりであった
それなのに医師は
大丈夫だろう—と投げ
まあまあ—と制し
あげくのはてに

解剖させろ—といった

南太平洋に降るのは
スコールばかりではない
死の灰も降る
南太平洋に流れるのは
北赤道海流ばかりではない
死の渦潮も流れる
人間の死を人間の死と認めない
アメリカの核実験が降り
日本の汚ない仕打ちが降り
そうして
三十数年が流れつづける

—もっと生きたい!!
私の耳にはりさけんばかりの兄の声は
いまも生き続け
共鳴の振り子となって
ビキニを告発しつづけている

—故・高木和一さんの妹さんの証言—
鮪漁船・第八順光丸(二四六トン・神奈川県三崎船籍
・二十四名乗組み)は三月一日の実験、四月二十六日、
五月五日の実験時、いずれもマーシャル海域で操業中
爆した。
その検知数は船体で三〇〇〇カウント、しかし、人体
の反応はあったものの、風呂に入って洗うことを指示さ
れただけだった。

故・高木和一さん(当時二十五才)は被爆後、入退院
をくり返しながら昭和三十一年三月二十三日死亡した。
病名は「急性骨髄性白血病」であった。